◆左京三条二坪二坊(長屋王邸)の調査
―第269-4次

1　はじめに

奈良市二条大路南一丁目、奈良そごう百貨店西隣のビル建設にともなう事前調査。調査面積は約90㎡。5月30日に調査開始、6月24日終了。調査地は、平城宮跡第178次調査区の西方、同186次西調査区の南方に位置し、奈良時代の平城京左京三条二坊二坪の南西部、長屋王邸の敷地でいえば南辺中央付近にあたる。

調査地の基本層序は、近年の盛土、耕土の下に灰褐砂質土、黄褐粘質土と続き、その下の暗灰褐粘質土が遺物包含層となる。遺構検出面はこの包含層の直下の淡灰褐粘土で、その標高は59.90～60.00m付近。

2　検出遺構と出土遺物

第178次調査で、B期(720年頃～729年／時期区分は『奈文研学報第54冊』による。以下同。)の南北両庇付き東西棟掘建柱建物SB4235の東端1間分を検出していたが、今回の調査ではその西延長上で、東端から数えて4間目と5間目の南北側柱、同庇柱の柱穴計8穴を検出した。5間目に妻柱がないことから、この建物は桁行6間以上の規模をもつものと判明した。側柱の掘形は、おおむね一辺1.5m前後の方形、庇柱の掘形もそれよりやや小さい程度。柱間の寸法は、『学報』では桁行で3.0m、梁間は身舎2.8m、庇3.0mと報告されているが、今回の断割り調査の結果や東端から数えて4間目の北側柱の柱穴底に据えられていた礎盤の位置からすると、桁行10尺（1尺0.295m。以下同)、梁間は身舎10尺、南庇10尺、北庇9尺とみるのが妥当であろう。なお、礎盤は扁平な石を割って作ったもので、30×25cmの大きさ。他の柱穴にはないことから、柱長の調整のため、現場であわせて用いた

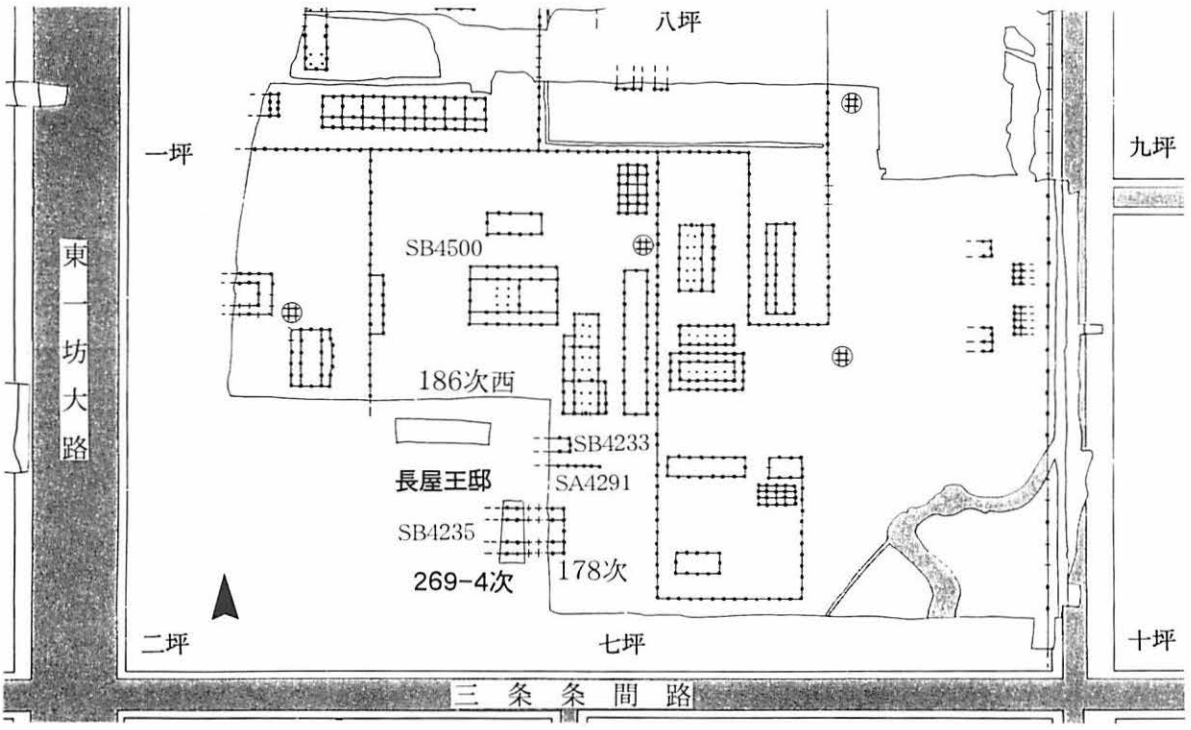

図36　発掘調査位置及び周辺遺構配置図

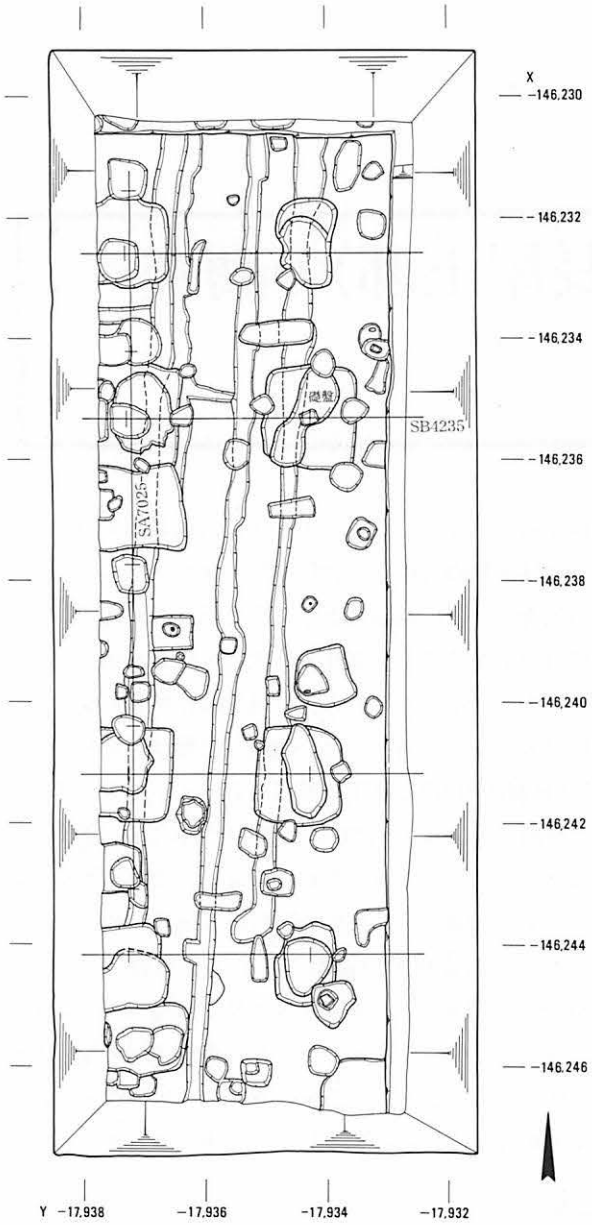

図37　第269-4次調査遺構平面図

ものと推定できる。

SA4235以外の検出遺構でまとまるものとして、調査区西端付近で検出した掘立柱南北塀SA7025がある。4間以上で、柱間寸法は検出したうちの北から2間目が12尺、それ以外は9尺。SB4235の柱穴を切っていることから、これよりも新しい。ほかにも柱穴をいくつか検出したが、調査区内でまとまるものはなかった。

主な出土遺物としては瓦がある（表12）。軒丸瓦6282Cと6663AはC期(729～745年頃)、6225EはE期(750～760年代）のもので、いずれも天平初（729）年の長屋王の変以後のものである。なお、土器はごく少量出土したのみ、木器・金属器の出土はなかった。

3　まとめ

今回の最大の成果は、大型建物ＳＢ4235の西延長部の検出である。上述のとおり、東から5間目で妻柱がなかったことから、この建物の規模は6間以上である。さらに、桁行はふつう奇数の間数であり、7間または9間と推定できる。しかし、現状では、西端部未調査のため確定できないので、SB4500との関係から考察する。

軒丸瓦			軒平瓦		
形式	種	点数	形式	種	点数
6225	E	1	6663	A	1
6282	C	1			
形式不明		1			
軒丸瓦計		3	軒平瓦計		1

丸瓦		平瓦		塼	
重量	28.1kg	重量	115.9kg	重量	3.4kg
点数	366	点数	1,198	点数	2

表11　第269-4次調査出土瓦塼類集計表

長屋王邸は4町占地で、塀によって中央内郭・東内郭・西内郭・北外郭・東外郭に区分される。このうち最重要区画の中央内郭にあって、長屋王邸正殿と考えられるのが桁行7間、梁間3間の身舎の南北に庇が付く東西棟建物SB4500である。A期（710～720年頃）にこの南方にあった内部区画施設SA4582・SA4291はB期(720年頃～729年）に廃され、かわってSB4235がたてられる。

SB4500の中心点Ｐの座標はX＝－146176.15、Y＝－17936.10。一方、SB4235を桁行7間と仮定すると、その中心点Ｑの座標はX＝－146238.25、Y＝－17932.80、桁行9間と仮定すると、その中心点Ｒの座標はX＝－146238.25、Y＝－17935.80となる。したがって、直線PQの国土方眼方位に対する振れはN3°02′31″W、直線PRの振れはN0°16′36″Wである。長屋王邸全体の国土方眼方位に対する振れは、周辺の条坊にほぼ沿うと考えられるが、東一坊大路の振れはN0°17′16″Wである（『学報』）。これは直線PR、すなわちSB4500の中心点とSB4235を桁行9間と仮定した時の中心点を結ぶ直線の振れN0°16′36″Wとほぼ一致する。また、SB4235は正殿SB4500南方の広場の南端を区画する建物であり、正殿に対応する建物として建設されたと考えられることから、SB4235の建設に際してはSB4500と中軸線を共有するように計画・施工されたと想定できる。この観点に立てば、SB4235は桁行9間であった可能性が極めて高い。その場合SB4500とSB4235の中心点間距離は62.1ｍ、ほぼ210尺に相当する。なお、『学報』でＢ期のSB4500南方区画施設と推定したSB4233・4291は上記の広場内にあり、いずれも柱穴が比較的小さく、仮設的な施設と考えられる。

（小野健吉／計測修景）